



## 都市レベルでの環境設計

田村 明 (横浜市企画調整部長)

1970年代は人類文明の集積が、ついに人間そのものを押しつぶしてしまうか、それとも人間そのものが自らの力でふたたび人間と人間らしい環境とをとりもどすかの決戦場であると思います。建築家は好むと好まざるとにかかわらず、この戦線のどちらかの陣営に参加させられるでしょうし、現に参加しつつあります。

1個の建築物で同時に環境計画でありうるものもないではないでしょう。しかし、それはきわめて稀な場合で、建築家は与えられた環境条件の中で仕事をさせられることが多いのです。

建築が人間の環境をつくる有力な手段であることはもちろんですが、それには現代社会は複雑化しすぎました。もはや個々の建築家やエンジニアだけでは、単なる手段に使われてしまうおそれがあります。このような時代にあっては、人間ひとりひとりが人間を押しつぶす社会システムに抗議することが必要ですが、さらに建築を総合の技術として回復することが肝要です。それには建築をもう一度、その外側に立って眺めてみる必要があるでしょう。私はそこに生まれる新しい技術を環境計画のプランニングと呼びたいのです。

プランニングという言葉は都市計画・地域計画をはじめ、各種の施設計画にも構想・企画・調整・演出などの必要性を通じて認められてきましたが、各種の技術の総合化のためのものであることはもちろん、その目的がこのような環境計画に向けられなければならないと思います。人間環境には総合性をとりもどさねばなりません。それにはセクト化した国レベルでは困難で、都市レベルの自治体でこそ可能性が残っているのです。現在、さまざまな障害はありますが、自治体強化を通じて、横浜だけでなく、全国モデルとなる仕事をして行きたいと思っています。具体的には、鉄鋼業に画期的な大気汚染防止の基準を出したこと、宅地開発業者に環境形成の責任を負わせる基準をつくったこと、その他、大通公園という人間の場を都市の中心につくろうとしていること、地下鉄のデザイン委員会を組織して、地下鉄も人間環境にふさわしいものにしようとしていることなど、いろいろやっています。